

マルチモーダルな読解における図像と音声の受容が与える影響について の実践的研究

大澤千恵子（東京学芸大学日本語日本文学研究講座）

○渡邊 裕（東京学芸大学附属世田谷中学校）

小野田雄介（東京学芸大学附属小金井小学校）

扇田浩水（東京学芸大学非常勤講師）

我妻夢子（東京都新宿区立愛日小学校）

齋藤千尋（茨城県守谷市立黒内小学校）

代表者連絡先：cosawa@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】読解力 / マルチ・モーダル・リテラシー / 国語科教育

1 はじめに

（１）背景及び目的

文科省・国立教育政策研究所の「OECD 生徒の学習到達度調査（PISA2015）のポイント」において、数学的リテラシー、科学的リテラシー、読解力のうち、我が国は、数学的・科学的リテラシーが高い結果を示したのに比して、読解力には課題がみられた。読解力について国語科教育が担う役割は大きい、これまで国語においては文字言語による読解および表現が中心的活動であった。文字言語偏重を超えて、より深い読解力育成のために、近年は英語圏を中心にマルチ・モーダルな読解に注目が集まっている。言語だけでなく、写真、短編映画、ドキュメンタリー、広告、CM などを使った授業の方法の開発と実践が行われるようになっており、その背景には、ICT の発達による子どもたちを取り巻く言語環境の変化がある。マルチ・モーダルな読解を詳細に検討すると、図像と 音声を活用し、小・中・高と系統的に思考力と想像力の育成していくことが有効であると考えられる。我が国でも2010 年代以降、学習に取り入れられるようになってきているものの、現時点では課題は多い。

2 本プロジェクトの概要

（１）図像や音声を活かした多角的実践（授業及び読み聞かせ）

本プロジェクトでは、前年度の成果発表において指摘を受けた、幼小連携への貢献の可能性を探り、定番教材の絵本を活用した授業や読み聞かせにおける子どもたちの音声や図像への反応を観察した。まず、東京都新宿区立愛日小学校において、2 年生の定番教材であるレオ＝レオニ「スイミー」の学習を、絵本を用いて行った。その際、子どもたちは、絵本の挿絵と言語表現とを関連付けて読解しようとしている姿が見られた。子どもたちは、就学前から絵本という媒体や読み聞かせに触れてきており、視覚的に絵や挿絵を、聴覚的には音声として物語を受容してきているにもかかわらず、国語科の読解において挿絵の重要性が認められてこなかったが、言葉と図像の関連性を通して読解が深まっているようすが見て取れた。



本研究では、図像だけでなく音声にも着目している。初年度は、マルチモーダルな読解につながる図像や映像と音声の観点から理論を構築するため、小澤俊夫昔話講演会やワークショップ（世田谷パブリック・シアター）を行ったが、今年度は、「語り」と「声」に着目し、音声言語が重要な役割を持つ読み聞かせの実践も行った。海外渡航が可能となったこともあり、日常の生活言語が母語以外の海外日本人学校にて、国語科の授業視察と、読み聞かせの実践、また多言語環境にある中での幼小連携の可能性を探るため、バンコク海外日本人学校と日系のインターナショナル幼稚園を訪問した。日



本人学校では、子どもたちの言語環境に鑑み、語彙を増やしていく際にも身体感覚が重視されていた。また、通常6年生の定番教材であり、難解であるとされることの多い宮沢賢治「やまなし」の絵本を読み聞かせした際には、2年生の一学期ながらも言語表現の難解さを超えて、物語に集中する姿が見られた。このことは、文学的文章が言語の難解さによって、子どもたちの理解そのものを阻害しているのではなく、言葉がイメージとして頭の中に浮かばないことが課題点であることを示すものである。これまで、国語科の「読むこと」においては、他教科に比して系統性が必ずしも明確ではなかったが、語彙とイメージを図像や音声を関連付

けて複雑化しながらその系統性を確立することで、幼・小・中・高に展開していく学習を構築することへの可能性が見いだせたといえる。そのことは、さらに高大接続の学習へもつながることが期待できる。

これらの予備的な実践や調査を受けて、2つの公開授業実践を行った。2023年度の8月の現職教員に向けたセミナーと、11月の教員養成課程に在籍している学生への授業公開である。いずれも、附属小金井小学校の小野田雄介教諭が公開授業実践を行った。

それぞれの授業の概要について、小野田教諭の指導計画および学習指導案を参照しながらまとめる。

授業実践の概要 8月

目標	・語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して、語や語句を使うことができる〔知・技〕 ・文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめることができる〔思・判・表等〕Cオ ・文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げることができる〔思・判・表等〕Cカ ・存在の手触りを感じ、作品の世界を読み広げ、国語を大切に、思いや考えを伝え合おうとする〔学びに向かう力、人間性等〕
対象	附属小金井小学校 5年2組 34名 グラフィックカー、朗読者 計36名
日時	令和5年8月26日(金) 13:05~13:50
内容	グラレコと朗読を用いた詩の授業

まず、一つ目の実践については、小野田教諭は、「語感や言葉の使い方に対する感覚」を駆動させながら、「文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめること」を「意味」を読む面として、「文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げること」を「存在」を感じる面としてみたいと述べる。また、小野田教諭は視覚情報である、グラフィックレコードの機能について、次のように説明する。には、もちろん構造化の機能もあるが、ここではグラフィックの働きが期待できるという。なぜなら、グラフィックは非言語であるためである。また、授業中の子どもたちの発話が非言語であるグラフィックとして記録されることは、言語の非言語化という逆照射がなされることによって、詩の世界の読解に新たな光を当てようとするものでもある。

本実践では、グラフィック・レコーディング(以下グラレコ)の技術を板書に活用したり、劇団員による感情を込めた朗読を取り入れたりして、詩を深く読んでいく授業実践にも展開させた。子どもたちにとって、グラレコによる視覚情報が、自己の思考を深め、劇団員の声が感情に刺激を与えている姿を見取ることができた。

さらに、声(朗読)においては、音の試聴という機能に期待した。音として詩の世界と接触することは、音楽の鑑賞に近い構図が認められ、非言語への世界の扉をひらく可能性がある。児童自身も自分

で声に出して読む場面を意図的に多く設けるとともに、谷川俊太郎の詩「海の駅」をどのような音で再生してもらうことで、言葉が生きた感覚を持つものとなるかについて、子ども達話し合いながら進めることを重視した。様々な声で「海の」を聴くことで、文字言語として読んだ時とは異なる、新たな詩の世界がひらけることが期待できるためである。

以上のような、小野田教諭の指導案における試みは、実際、グラフィッカーと朗読者の参加により、教師による言い換えや板書を通した構造化を超えて、子どもたちが詩の言葉や自身の言葉を生きた言語として捉えさせるものであった。海外では、「ドラマ」のという演劇の授業が行われることがあるが、国語教育の枠組みで、グラレコとコラボレーションして読解力の向上のための学習を行ったことは、国際的な国語教育研究においてもインパクトを与えるものであると考えられる。

授業実践の概要 11月

目標	・語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して、語や語句を使うことができる〔知・技〕 ・作品の世界を具体的に想像することができる〔思・判・表等〕 ・作品を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめることができる〔思・判・表等〕 考えたことを表せる言葉のよさに気付き、作品の世界を広げ、国語を大切に、思いや考えを伝え合おうとする〔学びに向かう力、人間性等〕
対象	附属小金井小学校 5年2組 34名 初等国語科教育法履修者 42名 計 76名
日時	令和5年11月15日(水) 13:00~14:50
内容	絵本を用いた宮沢賢治童話の授業 学習の流れと場の構造 Structure (全9時間) は以下の通り。 第1次(1-2/9) 作品に出会い、感じたことを共有し、読み深めたいことをまとめる。 第2次(3-5/9) 読み深めたいことを中心に、作品世界を読み広げていく。 第3次(6-9/9) 作品世界について考えたことを表現する。

小野田教諭は、宮沢賢治の「雪わたり」を読む児童の反応について、一般的な解釈図式では解けない点がいくつかあることを予測する。それは、本教材が「ファンタジー」と呼ばれる現実を超えた物語文に分類されることに起因するのだが、これまでの学習の解釈図式を超えた学びとするために、マルチ・モーダルな読解の方法を活用することで、物語が促すイメージの飛翔を子どもたちに味わわせることを試みた。そのための教具として、大判の小林敏也の絵による絵本「雪わたり」(好学社)を一人一冊用意し、絵本を使って授業を進めることを構想した。教科書と異なり、各見開き1ページの構成で展開されるところも、読み手に流れる時間をゆったりとしたものにすると小野田教諭は、予測しており、そのことが作品世界とのコミュニケーションをよりよくするとの考えに基づいている。

授業見学をした大学生は、従来の教員主導型とは大きく異なり、児童主体の学習のありようや読みの深まりに驚くとともに関心を示していた。子どもたちの読解は、絵本の絵を通して言語表現と物語世界を頭の中にしっかりとイメージできているだけでなく、その世界観が共有されているために、話し合い活動が単なる読みの交流を超え、深い読解へと導かれるものであった。国語科の物語文を「読むこと」においては、しばしば正解がなく何でもありの授業になってしまうのではないかと懸念が示されることがあるが、マルチ・モーダル・リテラシーによってそうした無軌道な広がりを防ぐとともに、教室で読むからこそ共有できる学びの場が提供でき、読書活動とは異なる読みを教師も子どももともに実感することができるのである。

このように、マルチ・モーダル・リテラシーを図像(映像)や音声の観点から再構築した読解力の向上は、日本の学校教育の最先端化を先導する研究であるとともに、広く国内外において教育に関

する研究成果を発信できる得るものである。また、授業実践や学会における研究発表を行った本プロジェクト構成員は、本学教職大学院の出身者であり、附属学校や公立学校の教壇に立っている。彼らは、高度な実践的指導力と研究への意欲を兼ね備えたスクールリーダーとなっており、教職大学院の教員養成に寄与していると考えられる。その授業実践を教員養成課程にある学部生が見学することで、研究と実践と育成の循環的学びの形成も可能となった。

3 成果

本プロジェクトにおける研究成果は以下の通りである。

【紀要 / 論文】

1. 清水良, 渡邊裕, 大澤千恵子 (2023) 学習者の視点を踏まえたファンタジー教材の系統的学習指導, 東京学芸大学国語教育学会研究紀要 19 巻, 37-48, 2024 年 3 月 .
2. 大澤千恵子 (2023) 不思議探究としての「ファンタジー」のリアリティ, 現代宗教 2024, 71-94, 2024 年 1 月 .

【書籍】

1. 扇田浩水, 山田夏樹, 大澤千恵子, 千田洋幸編, 文学理論と文学の授業を架橋する—虚構・語り・歴史と社会(担当:共編者(共編著者), 範囲:編集委員 / 執筆者), 学芸大学出版会, 2024 年 3 月 31 日 . (ISBN: 4901665650) .

【学会発表等】

1. 大澤千恵子 (2023) ファンタジーの特質に関する児童文学的知見—ファンタジー・メルヘン・リアリズム—, 全国大学国語教育学会信州大会, 2023 年 11 月 5 日 .
2. 清水良, 渡邊裕 (2023) ファンタジーを読むことで広がる読み手の想像力とそのリアリティ—小中連携による系統的な想像力の育成の実践的提案—, 日本国語教育学会研究部主催令和 5 年度第 2 回公開研究会, 2024.3.23
3. 齊藤千尋 (2022) 音読を通して、生きた心の声を聴く—宮沢トシ「自省録」の音読, 全国大学国語教育学会千葉大会ラウンドテーブル, 2023.10.16.

【講演会・研究会・学校訪問等】

1. 小野田雄介 (2023), 詩の世界を読み広げよう, 附属小金井小学校現職教員研究セミナー「授業をグラレコしてみる」公開授業, 2023 年 8 月 26 日 .
2. 大澤千恵子 (2023) 教室で文学を読むことの価値, 附属小金井小学校現職教員研究セミナー「授業をグラレコしてみる」講演, 2023 年 8 月 26 日 .
3. パンコク日本人学校訪問 (2023) 海外日本人学校における国語教育および幼小連携、読み聞かせについての研究。2023 年 7 月 25 日～29 日
4. 小澤俊夫昔話講演会 (2022) 昔話における語りの知見を国語教育の現場に活かすワークショップ, 2022 年 10 月 10 日, 於: 東京学芸大学 .
5. 風越学園授業訪問 (2022) 新型コロナウイルス感染症拡大のため中止 .

4 おわりに

本プロジェクトは、2 年間の実施計画で行われた。これまでの研究成果については、大学における教育・附属学校・公立学校などへ還元することができていると考える。初年度は、理論構築を目的として講演会やワークショップを中心に行い、それを踏まえて今年度は国内外での実践を行いながら、学会等の場での発表も併せて行った。

【大学】教員養成課程の学部生に授業公開し、本研究の理論に基づいた実践を見学する機会を設けた。コロナ禍以来現場との交流が減少していたが、教員養成と研究および実践の循環的機会となった。

【附属学校】附属小金井小学校で実践された 2 つの試みは、現職教員セミナーや国語部会授業研究の場となり、様々な立場の教員に発信でき、反応も大きく、成果を感じることができた。

【公立学校】定番教材を使うことで、公立学校でも実践可能な理論構築と実践方法の確立がなされ

た。さらに、本学教職大学院出身者が現場においてスクールリーダーとして研究と実践の両面から発信できる機会となった。

申請者らは同プロジェクトに採択を通して、国語科におけるマルチ・モーダル・リテラシーの可能性について実践を重ね、その成果を学会発表や研究紀要に発表するとともに、書籍も出版した。